

※冒頭は飛ばしています。

「きつと普通の人ではこの疑似触手玩具を全て使ったにしてもいくことはできないよ。それどころかうやめてくれと言うだろう。でも慶人くんは一度だってそんなことを言ったことがない。ちゃんと与えられた刺激だけで絶頂しようと努力して、たくさん練習して、それでスムーズにイけるようになった。私はそういうひたむきなところも好きなんだよ」

「んっ……総一郎さん……」

「それに、ほら、たつたそれだけのことを考えただけで、貞操帯の中で窮屈そうに勃起しようとするおちんちんも可愛い」

「あん……」

金属の隙間から、宗形がそつとペニスをくすぐった。

「いいこだから、小さくなってごらん。慶人くんは今からおしっこをするんだよ」

「あっ……やあ……」

ペニスへの語り掛け。恥ずかしい。

「……困ったね。もつと硬くなってしまった」

「や、だってっ……総一郎さんがおちんちに話し掛けるから……」

「だがこのおちんちは慶人くんの言うことを聞かないんだろう？ それなら直接お願いした方がいいかと思って。私の大切な慶人くんが膀胱炎になる前におしっこできるようにしてくれて」

「あっ……やあ……総一郎さん……おしっこしたいよおっ」

尿意がかなり強くなってきた。でも出せない。勃起が治まらない。

「大丈夫……慶人くん、普段イクのを我慢しているときのようにしてごらん。身体から力を抜いて、ゆっくり深呼吸をして」

「はい……ふう……ふう……ふーっ……ふーっ……」

また目を閉じて、お腹の奥、膀胱の状態を意識する。もう限界だから出さないと。じゃないと勝手に溢れてしまう——さっきのように。

「あ……出る……」

数回深呼吸を繰り返せば、ペニスは排尿が可能なほどに落ち着きを取り戻した。一気に身体が排尿モードに切り替わる。

「うん、おちんちちゃんと小さくできたね」

「あっ……」

じわ、と尿が膀胱から尿道に漏れ出すような感覚があった。

「あ、あっ……」

「しー……」

「んっ……ふうう……ふううう……」

そうだ。絶頂、排便だけでなく排尿だって落ち着いてしなければ。

宗形の手を掴み、握らせてもらって身体からもう一度力を抜いていく。

「あ……ん……」

「ああ……出てるよ……ちゃんとお漏らしできてる」

「ん……ふうー……ふううー……ふうー」

お腹に力を入れての排泄は厳禁。だから宗形の言うようにお漏らしを意識して、ただ漏れ出すだけの状態にもっていく。

「ふー……」

力を抜いているせいか、排尿の勢いは一切なかった。しよろしよろ……と音もなく落ち、ペットシーツに吸水されていくだけ。

「慶人くん」

「……はい……」

「お話できるかな」

「あ……ん……はい……」

話しながら——リラックスしながらの排泄の練習、ということだろう。

「おしっこ気持ちいい？」

「はい……」

「漏れてるね」

「はい……勝手に出てる……」

「そう。とても気持ち良さそうだ。目もとろとろだね」

「やあ……見ないで……」

感じたら勝手に身体に力が入ってしまう。一度宗形から意識を逸らすために目を伏せる。

「上手。いいこ……自分で判断ができるね」

「はい……」

早く宗形の目を見ながらお漏らしできるようにになりたい。でも今は、そこまでできるようにはなれていない。

「おしっこが全部出たらまた飲み物を飲もうか」

「哺乳瓶……？」

「もちろん」

「うん……飲む……飲みたい」

あの甘い時間を思い出したら急に喉が渴いてきた。たくさん飲みたい。そしてまたこうしてたくさんお漏らしをしたい。

くくく

それ以上宗形の声を聞いていたら泣いてしまう気がして無理だった。だって疑ったのに、宗形は怒ることなく、むしろ早く帰ってくれると言ったのだ。そして抱く、と。

終話して携帯を枕元に置く。

「うう……」

好きだ。すごく好き。こんなに甘やかされてばかりでいいのだろうかと思ってしまうけれど、それでもこの宗形の作ってくれる環境が心地いい。ずっと一緒にいたい。

(でもそれなら迷惑掛けないようにしなきゃ……)

それにちゃんと宗形の好みになること。声を出さず、感じている顔もせず。ただ静かに身体の奥深いところでだけ快感を楽しむのだ。

(大丈夫……できる……)

きつとできる。いや、すぐには難しいと宗形も分かってくれている。だから順を追って希望を言葉にしてくれているのだ。少しずつ練習して一つ一つできるようになればいいと。だって今まで急かされたことも叱られたことも一度もない。

(よし……)

布団を捲り、どの角度からでも映るようにと身体から離す。そして普段しているように軽く背中を丸め、目を閉じる。

ゆっくりした呼吸。まだペニスの硬さは戻っていない。

(総一郎さん……)

そうだ、一方的に切ってしまった。でもきつと宗形は今もマイクの音を聞いてくれている——気がし

た。

「総一郎さん……すき……大好きです……早くおちんちん入れて……」

言い過ぎただろうか。宗形はまだ会社なのに。でももう時は戻せない。

(……聞いてないかもしれないし……)

結構長く電話をしてしまっていた。それに早く帰ると言ってくれたからそのためにマイクもカメラもオフにして仕事に集中しているかもしれない。いや、その可能性の方が高いだろう。

「すき……すき。総一郎さんすき……大好き」

聞いていないだろうと思ったら、普段はなかなか口にできない想いが溢れ出た。

「すき。すき。大好き。抱っこも、頭撫でてもらうのも、キスも……唇食まれるのも、舐めてもらうのも好き。舌を擦ってもらうのも好き……」

目を閉じれば宗形に愛される自分の姿が浮かぶ。もう宗形にされることなら何でも、全て大好きで苦しくなる。

(早くほしい……)

アナルがひくつき始めた。宗形のペニスが大好きなアナル。でもまだ今はエネマグラしか入れてあげられない。でもこれでちゃんと快感を得ながら我慢する。そしてイかに宗形の帰りを待つ。

「ん……」

今見ていなくても、きつと宗形は録画しておいたものをいつか見てくれるはずだ。そのときにでもいから褒めてもらえるよう、勃起したペニスが映りやすくなるよう身体をずらし表情を消す。

(ん……)

でもやはり気持ち良くて、無意識のうちに目を細めてしまう。把握しきれていないカメラの場所が気になってそわそわしてしまう。でもちゃんと感じながら声も表情も堪えているのだと分かってほしい。

「気持ちいい……おちんちん起ってる……」

もしかしたら角度のせいで勃起は映らないかもしれない。それなら、と言葉で状況を告げる。カメラとマイクが連動するのは分らないけれど。

「アナル……エネマグラがお尻の中の気持ちいいところぐいぐいする……気持ちいい……ここ、総一郎さんの指でこりこりしてもらうのが好き……っは、あッ」

宗形を思い出すと一気に快感が駆け巡る。気持ちいい。

「会陰も……好き……総一郎さんがたまにべろべろしてくれるところ……恥ずかしいから嫌って言っちゃうけど……でも本当はすごく好き」

絶頂を求める身体がびくんびくと震える。でもまだ我慢。

「ん…………ふう…………あん…………すごい…………きもち…………」

(っ、ダメっ！)

つい快感を追ってしまふ。

意識を逸らすためまた口を開く。

「本当は乳首も大好き…………前にお店でしてもらったみたいに乳首にも玩具がほしい…………乳頭の、先つばのところろろろされたい…………」

もう遠い過去のように思える。

あのときは疑似触手シリーズのオナホール、乳首用、尿道用ブジーの三点責めに加えて木馬に生えたデイルドも啜っていたのだ。

(でももう二度とない…………)

きつともう、あんなにたくさんの刺激をもらうことは一生ないだろう。それどころかむしろ少しずつ刺激を減らされている。

「っ…………ん…………」

でもいい。もつともつと敏感になって、なのに静かにイけるようになる。それができるようになったからどう、というのもないのだけれど、今はそれでもいい。

「ん…………好き…………総一郎さん…………」

宗形のペニスを想像しながらアナルをきゅつと締め付けた。

「慶人くん、ただいま」

「そう、い…………」

絶頂を逃し続けること四時間半。宗形が帰宅した頃にはもう、身体はぐったりと重かった。でもどれほど疲れていても「イきたい」という気持ちは消えるどころかまだまだ際限なく増していくばかり。

「っらそうだ」

「んっ…………」

勃起したペニスを宗形が持った。

「ああ、お漏らししていたね。お風呂に行こうか」

「あ…………」

そうだ。途中、勃起も萎えるほどの強い尿意が急にきて、そのまま漏らしてしまったのだ。突然のことだったので当然ペットシートもなく、結局垂れ流し。でもそれを知っているということは見ていく

れたということだろう。

「さあ、お風呂へ」

「や……総一郎さん……」

「ん？」

この尿も宗形の所有物の一つだというのならこのまま抱いてほしい。尿塗れの汚い身体だけれど、今のままペニスを入れてほしい。

「もう我慢できない……おちんちん……」

「身体は痒くない？」

「痒いけど……だめ？ おしっこ汚いからだめ？」

こんなに下腹部が苦しいのは初めてだったのだ。恐らくエネマグラが違うからなのだろうけれど、つらくてたまらない。

「汚いなんて……そんなことあるはずないだろう。このままで入るかな」

「んっ……はいる……もうお尻の穴とところだから……」

当然エネマグラより宗形のペニスの方が大きい。でもきつと入るし多少強引に入れたとしても締まりがいいと思ってもらえることだろう。

「抜くよ」

「んっ……」

珍しく性急な仕草だった。ずるっと玩具が引き抜かれ、ひくひく動くアナルを覗かれる。

「いやらしいな。イッてはいないね？」

くくく

三週間後――。

「慶人くん、おちんちんを見せて」

「はい」

感じている顔も隠せるようになってくると、宗形は唐突に身体を要求してくるようになった。見せて、と言われても普段から室内では全裸で過ごしている。だから足を開いて、手を退けて。

「ああ……ありがとう。よく見えるよ」

よく見えると宗形は言うけれど、そこにはもう決して取れない貞操帯が嵌められている。だからもう、ペニスを丸ごと全て見てももらえる日が来ることはない。

「……うん……今日も可愛いね。そろそろこの小さな穴も気持ち良くしてあげようと思うんだけど」
「あ……」

小さな穴とは尿道のことだ。そしてそろそろというのは慶人が上手に静かな絶頂を迎えられるようになったと認めてくれたということだ。長かった。でもやっと認めてもらえた——なのに尿道を可愛がってもらえることへの期待で声が漏れてしまった。

「ん？」

「いえ……すみません、つい嬉しくて……」

失敗したら素直に謝る。でも宗形は恐らく失敗とは思っていない。

「おちんちんの穴気持ち良くしてほしい？」

「はい……」

触れてほしい。もう檻から出ることのないペニスに、少しでも。

「じゃあ、ブジーでも静かにイってみようか」

「……はい！」

寝室に移動すると、宗形はすぐにクローゼットの引き出しを開けた。その間にベッドに座り、大きく足を開いて待つ。

「いいこ。ちゃんと準備できてるね」

「はい……宜しくお願いします」

後ろ手について上体は起こしておく。そして、金属に覆われたペニスの消毒が終わるのを待つ。

「入れるよ」

「はい……」

以前一度だけ使ったことのある疑似触手ブジー。でも今回は久しぶりだからということ、前回のものよりも少し細いタイプだった。

貞操帯の隙間から、細いそれが挿入されていく。違和感はあるけれど痛みはない。むしろそれよりも――。

「痛くない？」

「ん……」

「痛かったら痛い」と

「大丈夫です。ただ気持ち良くて……」

それは驚くほど痛みを感じないブジーだった。尿道が緩いのかと思うと怖いけれど、きつと金属やチューブのような硬さがないからだと思う。

「そうか。慶人くんの穴はどこも気持ち良くなるのが上手だ」

「ん……」

あまり言わないでほしい。恥ずかしくて否定をしなくなるけれど、口を開くと高い声が漏れてしまう。

「……さあ、そろそろ気持ちいいところだよ」

「ん……はい……ふー……」

覚悟を決めるように目を閉じて息を吐く。唇を尖らせて、細く長く。

「ふー……ふー……ん……ふうー……入ってる……」

「うん、入ってるね……ここまでかな。これ以上入れると膀胱に入っちゃうから」

「はい……」

小さなペニスの先端から飛び出したブジー。けれどまだ十センチ近く残っている。

「あ……垂れてる……」

「ん？」

「おちんちんの先っぽ……ブジーが」

金属ならただ突き出ているだけだけど、これは柔らかいので挿入できず残った部分が垂れてしまっていた。

「ああ、おちんちんが小さいからね」

「っ……」

ペニスが揺れたせいで垂れたブジーの残りも揺れる。

「切ってしまおうか。垂れていると邪魔だ」

「あ……、でも……もったいない……」

せっかくの玩具。宗形の会社の人が試行錯誤して作り上げたもののなのに。だから大事にしたい、と思っただのに。

「だが、使わないだろう？」

「あ……そう……ですけど……」

「慶人くんのおちんちんがもう少し大きかったら使えたが……こればかりは仕方がないね」

「んっ……」

遠回しに小さいと何度も言われ、感じてしまう。

「それにこれから射精もなくなってどんどん小さくなる一方だからね。これからおちんちんが小さくなる度にブジーも短くしていこうか。切った分を残しておけば、どれくらいおちんちんが小さくなったのかが分かるよ」

「っ……」

（イきたいっ……）

もう気持ちいいとか興奮するとか、いちいち感じていられない。ただとにかくイきたい、という気持ちだけ。

けれど宗形は無情にも寝室から出て行ってしまった。訊かずとも分かる。ハサミを取りに行ったのだ。

「さあ、切ろうね」

やはりそうだった。宗形は戻ってきて開口一番にそう言ったのだ。

「……はい……おちんちんに入らないところ、切ってください……」

なんて惨めなお願いだろう。自分のペニスの小ささを強調するような行為だ。

くくく

週末――。

「さあ、そろそろ行こうか」

「はい！」

結局その後、宗形は普段通りの様子を見せていた。プラネタリウムの予約も取ってくれたし（なんと指定席があるらしい！）行きたくないと言うこともなかった。ならあの困惑の様子は一体何だったのだろうと思うけれど、話を蒸し返すのもよくないかと思いながら何事もなく今日まで来た。幸い昨夜から少しウキウキしているように見えたし、やはり思い過ぎだったのだろうと思うことにしていた。

家を出て、宗形の運転する車に乗って。そして着いた先では宗形が席の確認までしてくれて。

（うわ……すごい……）

受付カウンターのあるホールの天井にもたくさんの星が描かれていた。まるで本物のよう。残念なことに星座すら全て言えないのだけれど、こうして見る分にはとても綺麗だと思うし、プラネタリウムでは説明も聞けるはずだからそれで知っていけばいい。

「お待たせ」

「すみません」

お金を払うことから何から何まで全て宗形がしてくれていた。慶人がしていることと言えば、リュックを背負っているだけ。

（そういえば何が入っているんだろう……？）

出掛けに渡されたリュック。中身は宗形が用意したようだけれど、まだ開けてすらいらない。

「席に座る前にトイレに行っておこうか」

「あ、そうですね」

上映時間は結構長い。しつかり説明をして、綺麗な映像まで見せてくれるらしいので、家でも済ませたけれど念のため。

「天井もすごく綺麗ですね」

トイレに繋がる通路も全て星の絵で覆われていた。天井だけでなく壁にも絵が描かれている。

「ああ。星だらけだ」

「いつから星が好きなんですか」

「あー……まあ……そうだな、嫌いではないんだが」

どういう意味だろう。もしかして別に星が好きというわけではないのだろうか。

（もしかして僕が星好きって思ったとか……？）

慶人としても、嫌いではない、というレベルだ。そもそもあまり見えないので、好きとか嫌いという概念すらないというか。

「ああ、ここだよ」

問うより先にトイレに着いてしまった。宗形の後に続いて中に入る。

（あ……そういえば初めてかも……）

一緒に住んでいても宗形と一緒にトイレに入ることは——慶人が用を足すときしか——ない。もし一緒に住んでいなくて、よく外で会うようならこうしてトイレに一緒に入ることもあったのかもしれないけれど、本当に外に出ない生活を送ってしまっている。

（緊張するかも……）

さすがに排泄を覗き込むようなことはしないけれど——でもトイレには他に誰もいない。少しくらい見てみたい、と思ってしまう。

（だっていつも見られてばかりだし……あ……でもダメだ）

つい意識が宗形の排泄に向いてしまっ忘れていたけれど、慶人はもう立って排泄することはできないのだ。貞操帯を見られるのは恥ずかしいし、何より貞操帯が邪魔で皮が剥けないので立ってすると尿が四方に飛び散ってしまうのだ。

「あ……じゃあ……」

また後で、という挨拶もおかしいなと思いつつ個室のノブに手を掛ける。総一郎さんの排泄が気になったのにな、と残念に思いながら中に入ってドアを閉めようとすると、ぐい、とドアが外に引かれた。

「えっ」

そして何故か宗形が個室に入ってくる。

「総一郎さん……？」

今は他に人はいないけれど、もし出るときに見られたら、と思うとまずい気がする。個室から年の離れた男が二人で出てくるなんて、なかなかいい言い訳は思いつかない。

「おしっこをして」

「あ……」

カチャン、と音がした。視線をやると、宗形が器用に後ろ手で鍵を閉めている。

「ああ、リュックは私が持つておくよ」

肩からリュックが抜き取られた。どうやら宗形は本気らしいと感じ、それなら早く済ませて出た方がいいと判断する。

（恥ずかしいけど……）

家でなら見られ慣れている。普段からカメラでも見られているし、音もマイクで聞かれている。朝晩や休日等、宗形が在宅しているときは尿でも便でも一緒だし——けれど、やはりここは外だ。どうしても緊張してしまう。

「……出ない……」

下着を脱いで便座に座っても、尿意はやってこなかった。家で出したばかりだからなのか、緊張からなのか。

「出せるよ。朝は少し量が少なかった。それにそのあと飲み物を飲んだから、ちゃんと出せる」

「あ……」

やはり全て把握されている。嬉しい。そう思うと尿意がやってくる。

「ん……出るう……」

「しー……」

（あっ……）

そうだ、ここは外だ。つい一瞬前までここが外だから緊張するなんて思っていたくせにもう忘れてしまっていた。

目を閉じて尿意に集中する。それほど強くはないけれど、宗形が出ると言ったのなら出るのだ。

「……あ……」

数十秒掛かったけれど、尿はちゃんと出た。しよろ、という軽い排尿の後、徐々に水量を増していく。じよぼ、しゃー……音が変わるのは貞操帯の中で支えのないペニスが揺れているからだ。皮も軽く被ったままなので、尿の出方がその角度によって変わってしまう。

「……出ました」

小さな声で囁くように言う。幸い廊下に繋がるドアの開閉音も人の入ってくる気配もなかったけれど、念のため。

「うん、ちゃんと出せたね」

宗形がトイレトペーパーを手を取った。家と同じように拭いてくれるつもりなのだろう。

「足を開いて」

やはり宗形も小声だった。突然人が入ってきたときのために備えているのだろう。それが余計にドキドキさせる。

「さあ」

一つ領き足を開く。少し胸を反らせるようにしてペニスを浮かして。

「いいこだ」

貞操帯も濡れてしまっているの、トイレトペーパーを三回替えて清められた。最後に赤ちゃん用の流せるウェットシート——リュックから出されたので用意をしてくれていたらしい——で清めてもらって排尿はおしまい。

札を言って立ち上がろうとすると、なぜか宗形に止められてしまった。

「まだだ」

「え？」

「これを」

宗形がリュックの中から取り出したもの。それはパウチに入れられたブジーだった。

「っ……なんっ……」

「プラネタリウムは映画よりも静かだからね。これを入れて星を見ながらいきなさい」

「あ……」

もしかしてプラネタリウムを選んだのはこのためだったのか。だから宗形が星好きなのだろうと思っ
て言った言葉に困った顔を見せていたのだ。

「決して他の人にバレてはいけないよ。できるね？」

「あ……」

できない。だってこんなところで。

でも、しなかった。

「はい……」

慣れた手つきで尿道口の消毒をされ、それから小さな持ち運び用のローションを使ってペニスに挿入

された。そしてトイレを出て、ブジーを入れられた状態のまま、ゆつくりと歩いて指定席に向かう。

「っ……」

「どうした？」

「いえ……」

トイレでブジーを入れられた興奮。そして今から他の人がいる空間でいくのだという興奮。それらによつて起ってしまったペニスやリュックを抱えることで隠しながら——実際には貞操帯で押さえられているので気分的な問題だけだったけれど——歩く振動で声が出ないように気を付けなければならなかった。

「もう少しだ」

「はい……」

プラネタリウムが特に好きなわけではなかったことに加え、もう一つ分かったことがあった。それは、こういう目的のために感じている顔を隠す練習をさせられていたのだということだ。だって感じている顔も可愛いと言ってくれていたのだ。それなのに普通の顔をしてイケなんて。

(でも興奮する……)

もしバレたら、と思うとすごく怖い。きっと警察に捕まってしまう。公然……なんとかという罪で。でもだからこそバレないようにしないといけないのだ。とにかく宗形だけは守らなければ。

「ああ、あそこだ。あの席だよ」

円を描くように配置されたくさんの椅子。どれも大きくて、ゆつたりとした配置になっていた。しかし宗形が向かったのはそこではなくて。

「ここだ」

宗形が立ち止ったのは見るからにふかふかそうな丸いベッドだった。

「寝転んで星を眺められる」

「すごい……!」

一瞬ブジーの存在も忘れてはしゃいだ。だって寝転んで星を見るなんて、まるでテレビの中みたいだ。

「寝転んでらん」

靴を脱ぎ、遠慮なくベッドに寝転ぶ。ふわ、という普通のベッドの何倍も柔らかいマットが身体を包む。

「すごい……」

気持ちいい。でもこれは普通るときならば眠くなってしまうそうだ。

「これなら顔は見られない。声だけ我慢しなさい」

隣に寝転んだ宗形が耳元でこそりと言う。そしてすぐ、今からのことを思い出した。

「……本当に……？」

「もちろん。ああ、布団もあるから勃起は隠せる」

隣のベッドとは距離があるとは言え、人がいない場所ではない。そんなところでこんないやらしい言葉を発するなんて。

「さあ、身体力を抜いて」

「ん……」

さすがに腕枕はされなかった。けれど普段寝ているときのように布団を胸まで掛けてもらい、隠れたその中で指を絡めて手を繋ぐ。

「思ったより綺麗かもしれないな」

「思ったよりって……」

まだ上映は始まっていない。でもすでに天井では星が瞬いていた。

「私は……私もきつと星には集中できないが」

「え……」

「慶人くんの方が好きだからね」

「っ……」

そんな恥ずかしいことをこんなところで。それに体温が上がってしまうから止めてほしい。

「もしどうしてもつらかったら言いなさい。布団の中で抜いてあげよう」

「あ……抜い……」

「ああ、違うよ。射精ではない。おちんちんの穴で咥えているブジーのことだ」

「っ……」

わざとだ。わざといやらしい単語をチョイスしているのだ。だって顔も笑っているからこの推測はきつと間違っていない。

「ああ、ほら、始まるよ」

いつの間にか室内が静かになっていた。そしてブーという開演を知らせるブザーが鳴って、暗くなっていく。

「……大丈夫。たくさん気持ち良くなりなさい」

もう言葉を返すこともできなかった。だって小さい声で言っても誰かに聞こえてしまうかもしれない。だからただ、ぎゅっと手を握り返すだけにした。

『この星は……』

せっかく星座に興味を持てるようになる気がしたのに、全く集中できなかった。

(きもち……)

ブジーの表面が尿道をちろちろと擦っている。些細な刺激。でももうこの刺激だけでイけることはつきりと分かっているし、もう限界も近い。でも、周りに人がいると思うとなかなか絶頂を許すことができなくて、ただ必死に絶頂感を逃していた。

「ふう……ふうー……」

でもその呼吸音だって周りの人に聞こえてしまうのではと思うと怖くて。迫り来る絶頂感をなんとか必死にやり過ごし続ける。

「……イったかな？」

「や……まだ……」

「イけない？」

耳元に寄せられた唇。囁くような声。息が耳に当たり体温が上がる。

「や……こわ……」

「怖くないよ。大丈夫。いつも通りイってごらん」

いつも通りと言われても、もうそもそもこの環境がいつも通りではない。でもいけないことをしていると考えるとイきたくなってしまう。

「大丈夫。慶人くんはちゃんとイけるよ」

「ん……」

小さく頷き、宗形の手を握り直して天井を見上げる。

(あ……)

まるで本物の夜空のようだった。外で宗形といやらしいことをしているような気分になる。

(気持ちいい……)

後編

GPS とマイクの体内埋め込み・エネマグラ・公共の場での絶頂・疑似触手尿道ブジー・空イキ・貞操帯・射精禁止(封印)・絶頂練習等

大内クリニックが出てきますが、痛みもなければ血も出ないです。もちろんグロもなし。

後編約5万6千文字です

宜しくお願い致します。

gooneone